第二回リレー小説「梅雨」白組一番手

数野千

雨の日の次の朝はいつも、道路にみみずが這っている。

入学してから二年目の六月に入って一週目の月曜日、その日の講義を全て終えた私は、帰宅して早々に明日の予習を投げ出して、自室のベッドに横たわって目を閉じた。窓の向こうで雨が降っている。バケツをひっくり返したような、まるで洪水の、ゲリラ的な。轟々とどろき響くさま。私は考える。空気の抵抗を受けて底が平たくなった球形ではない雨の粒が、何千メートルも高いところから、ものすごい速度で真っ逆さまに落ちてくる。自動車に、屋根に、人の傘に、アスファルトに弾かれた雨滴は群をなし、流れた先にある地面に滲みこんで、乾いた土にこれでもかというほど己を叩きつける。乾きが潤されるまで、満たされても、飽和して飲み込めなくなり、吐くまで、吐いても。私は想像する。地中のありとあらゆる隙間に雨滴たちが忍び込み、仲間同士で結合し、底へ底へ星の中心へと進むのを。あまりの勢いに地面からぶくぶくと泡が立つ、酸素が追い出されるようにして地上へと逃げる、生きものたちは窒息する、雨に溺れる。

私は明日も一限から講義があること、梅雨前線がやってきたこと、週間の天気予報では全てのコマに傘のマークがついていたこと、明日の降水確率が七十％であることを考えて、考えて、それはどういうことなのか考える。手も足もない彼らがその赤黒いからだを波打たせ、泳ぐようにして地上を目指すのを、外に出て、雨に打たれてからだにこびりついた泥土が落ちるのを、やっとの思いで、全身で呼吸をするのを、それは人間にしてみたらどんな心地のものだろうと空想する。眠りに落ちかけながら、うつらうつらと思う。目覚めたときには、この雨は止んでいるのか、この雨は止んでまた別の雨が降っているのか、明日は晴れるのか。

火曜日も雨だった。

水曜日、霧雨が降り注ぐ中、傘は差さずに自転車を漕ぎ、午後七時からの所属しているサークルに顔を出すと、いつもの顔ぶれが揃っていて、いつもと同じに特に有意義な活動は行わない。居心地の良さにそっと息をつく。

「今降ってる雨はサークルが終わる頃には止んでるかなあ」

「今日はずっと雨だって」

「俺帰りどうしよう」

「私傘持ってるよ」

別のサークルのスペースで誰かと誰かが話している。形ばかりのミーティングを行って、後は各々で何某かをがんばってください、と部長がいい加減なことを言って掛け持ちの屋内フィットネス・クラブへいそいそと出かけていく。しょうがないので二つ上の佐原何某先輩とカードゲームに興じていると、何度目かのオーバーキルで決着をつけたあたりで「三隅さんは梅雨が嫌いなの」と佐原が聞いてきた。「はい、息苦しいですから」とデッキを熱心にシャッフルする振りをして積み込みしつつ答えると、佐原は眩しいものを見る目でこちらを見る。「何でしょうか」と視線の訳を尋ねると、「いや、いいねと思って」と言われた。無言でわずかに首を傾げると、佐原は苦笑する。

「大したことじゃないんだけど、ほら、否定から入る人、素直に質問に答えない人っているだろう。たとえばこの場合、逆に普通梅雨が好きな人っていますか、とか、あなたは好きなんですか、とか」

「ああなるほど」

合点がいった。佐原の言うたとえには覚えがある。

「俺はそういうのより、三隅さんみたいにまず問いに対して『はい』か『いいえ』で答えてから、簡潔な理由を付け加えたりするのが好きだなあ」

「そうですか」

そういうのは私も好きだと思って、「気が合いますね」と言い添えた。「気を遣わなくてもいいよ」と返された。とりあえず、カードを引いた。モンスターを一体、守備表示で召還するだけでターンを終える。

「何かあったら相談してくれていいからね、まずは一人で抱え込まずに誰かに話を聞いてもらうことが大事だよ」

柔和な笑みを浮かべながら佐原が伏せたカードは罠だろうか魔法だろうか、私は考えを巡らせた。最近の佐原は内側に踏み込むことを意図した発言が増えてきて、しとしとと降り続く雨に加えて面倒なことだった。

「佐原先輩は」

「うん？」

相づちの穏やかさに、言おうと思っていたことを口に出す気が失せて用意していた台詞を言い換える。

「傘、持ってきてますか。雨降ってますけど」

適当に取り繕うと、「傘かあ。盗まれちゃったんだよね」と佐原は乗ってきた。

「それはお気の毒に」

彼の傘は今頃どこにいるのだろう。いつのまにか雨足は勢いを増していて、この人は風邪を引くかもしれないなあと思った。

木曜日も雨だった。

金曜日、この日もやはり雨だった。これで五日間降りっぱなしである。夏になれば道路に水をまいて涼をとるというのに、とまだ一ヶ月先の季節に思いを馳せた。梅雨の間はこんなに雨が降っているのに、涼しいどころか蒸し暑い。気温が高いほど空気が含むことのできる水蒸気の量は増すのだったか。高校レベルの理科の話を、大学生になってすっかり自分の専門分野以外には鈍くなってしまった頭で引っ張り出す。

だからこの季節、汗をかいてもすぐに蒸発して体温を冷やしてはくれないし、洗濯物もすぐには乾かない（どころかうっかり外干しをしていて取り込む前に雨に降られてしまえば後はお察し）、冷蔵庫に入れても容赦なく倍速か倍々速で食べものは腐る。

何より嫌なのはこの湿った空気だった。深く息を吸い込めば、肺に満ちる気体は某かの核を依り代にして水をまとった目に見えないほどの微細な粒が過分に含まれた二酸化炭素と酸素と窒素とその他諸々の混合物。なれば今の時候に吸う空気は、他の季節に比べてきっと、一度の呼吸で取り入れることのできる酸素が少ないのだ、といつの頃からか信じている。深呼吸を繰り返しても、どうにも新鮮な酸素を取り入れて二酸化炭素を吐き出しているという気がしない。気分が優れない、もやもやする、訳もなく苛立つ、その理由は、頭に全身に血液を送り出す心臓に、水気や核になる粒子を含まない純粋な酸素が届いていないからだ、と私は考えている。明日の朝目覚めると、喉を痛めていることは分かっていて、それでも私は梅雨に入ってからというもの、夜の間はずっとエアコンの冷房をつけたままにしている。

そんな話をしたら、「道理で声が荒れてるわけか。のど飴舐める？」と学類開講の講義でよく一緒の席に座る友達にカリンののど飴を差し出されて、「うん」と大人しく頷いて受け取った。

「分かるよ、そういうことってあるよね、どうしたってやっちゃうっていうか、私はやらないけど。でも冬の間にストーブは付けっぱなしにしたい」

二酸化炭素中毒って文字が怖くてやらないけど、と言う彼女をほほえましく思いながら、私は「十和田さんは雪国出身だったっけね」と相づちを打った。十和田さんは、寒いところで生まれた寒がりだ。暑がりでもある。

「まあもうすぐ試験だけど、それさえ乗り越えたら自由の身になれる上に梅雨も明けてるから万々歳だよ津理恵ちゃん。生きよう」

物事の道理や真理が分かるという恵みを受けられますように、人と交わり縁を結ぶ渡し場の『わたし』になれますように、と三隅家のごく普通の夫婦がそれなりに親として当たり前の願いをかけて名付けた名前を彼女が呼ぶ。一方で十和田さんの下の名前は『沼湖』と書いてそのまま『しょうこ』と読むものである。「読みはともかく漢字がDQNネームで落ち込む」「どきゅん」「そう、でぃー、きゅー、えぬ。成人したら改名したい」そう十和田さんは主キーになりうるほどに希有な己の名前に対する鬱憤を私に常々こぼしている。

「それにしても蒸し暑いね」

十和田さんは講義中なのにスマートフォンを机の下でいじってTwitterを彼女曰く『監視』しながら私に話しかける。

「梅雨が明けたらさあ、二人でどっか行こうよ」

「どこかって、たとえば？」

先生が席を回って出席表を回収しているのをいいことに雑談する。

「津理恵ちゃんと一緒なら」

どこでもいいよ、いっそ今週暇なら私と、と十和田さんが言ったところで、ちょうどよく野ばらのチャイムが鳴った。これが今日の最後の講義だった。教室から学生たちがわらわらと退出していく中、残った私は続きを促す。

「私と？」

「私と」

十和田さんは一瞬ためらうように目を伏せてから、私にしっかりと目を合わせて「遊びに行かない？」と誘った。

今が土曜日の午前未明であることを、今までの全ては夢であることを、私の脳はようやく理解し始めている。悪夢をみた後特有の、痛いくらいに跳ねる心臓の鼓動。毎日見る夢の中、私はじりじりと太陽に焼かれながら立っている。日に照らされ、乾いて熱を持ったペデストリアンのアスファルトの上で、彼らはまさしくみみずがのたくったような文字のように奇妙にからだをくねらせている。鳥についばまれたのか肉の一部がえぐれて断面を露わにしているもの（烏だろうか雀だろうか、鳩かもしれない、土をつついて彼らを掘り起こしてついばんでいたのを私は見たことがある）、往来する自転車たちに轢かれたのかタイヤの幅と同じだけへこんでそこで胴体が二つにわかれていたりするもの（ちぎれても生き返るのは片方だけだったはずだ、脳を有した頭を持つ方だけが再生する）、彼らは一様に皆静かだった。発声器官がなければ鳴くこともできない。ただただ無言で蠢いている。洪水に浸された地中から這々の体で這いだして、やっとたどりついた息のできる場所で、彼らはあんまり無力で死ぬしかないものだから、可哀想になるくらいだった。殺されるのもしょうがない、だってここは本来彼らの居場所ではないのだから。それでも肺も鰓もなく、皮膚呼吸で生き長らえる彼らは池に落ちても海に帰っても死ぬしかないのだ。水を弾いてただ固い人工の道の上にしか逃げられない。そうでなければ、真っ暗な土の下、日の光も知らずに溺れ死ぬ。

私も同じだ。梅雨は嫌いだ。雨に溺れて、息ができない。

水分をいっさい含まない、乾いたところへ逃げたいと思った。そこでなら思い切り息を吸えるだろうと思った。エジプトという国名が思い浮かんで、いくら渡航費がかかるだろうと試算するまでもなくパスポートの取得だけでもどれほど手間がかかるかと考えた結果打ち消される。国外へ逃亡することはできない。大学生なのだから。

だから、そうだ、と私は思考を切り替えた。

そうだ、鳥取砂丘に行こう。